

# イタドリの栽培および優良系統の増殖

林業試験場 特用林産部 杉本 小夜

## 〔はじめに〕

イタドリは本県山間地域で広く食されている郷土山菜であり、近年、栽培や新たな商品開発を望む地域が増加している。このような背景のもと、林業試験場では日高川町生活研究グループ「イタドリ部会」の協力を得て、遊休地を用いた実証栽培試験を行っている。また、今後より効率的な栽培・加工を目指し、収量が多く加工し易いなど優良系統株の大量増殖について検討中である。今回は、栽培について収穫方法の違いによる収穫量の経年変化調査および優良系統候補株の茎頂培養における材料採取時期、培養培地の検討を行ったので報告する。

## 〔材料と方法〕

### (1) 栽培実証試験

収穫について根元直径 1.5 cm 以上、長さ 30 cm 以上の若芽を対象に、若芽を全て収穫する区（全収穫区）と、1 番芽のうち最も太い若芽を残し、それ以外を全て収穫する区（1 本残し区）を設置し、平成 25 年 6 月に地下茎苗を定植後、毎年収穫量を調査した。収穫は 2～3 日おきに行った。圃場は植栽前に耕耘、元肥を施し、2 年目からは年 2 回（春・夏）追肥を行い栽培した。

### (2) 組織培養による増殖

培養材料採取時期について、5～10 月に新芽を殺菌後（70%エタノール 1 分→有効塩素 1%アンチホルミン 20 分）、摘出した茎頂の培養 1 週間後の雑菌汚染率について調査を行った。また、培養に適する培地を検討するため、初代培養は、基本培地の MS 培地および微粉ハイポネックス（N6.5-P6-K19）0.3%培地（以下、H 培地）と、植物ホルモン（NAA 0.1mg/L、BA 0.1mg/L）の組み合わせを、継代培養は、MS 培地濃度と植物ホルモン（NAA 0.01mg/L、BA 0.1mg/L）の組み合わせを検討した。なお、各培地のショ糖濃度は 30g/L とした。

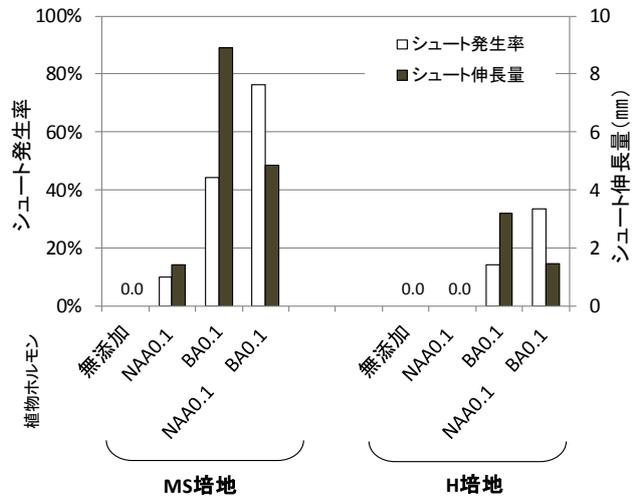
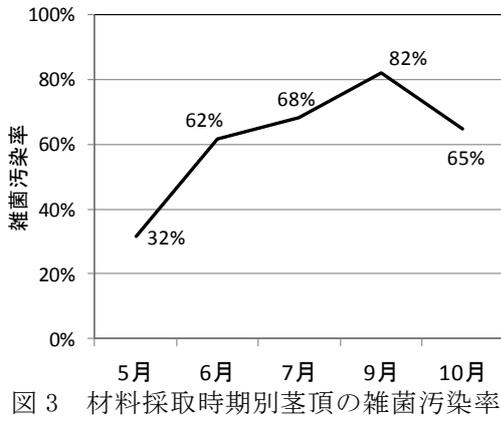
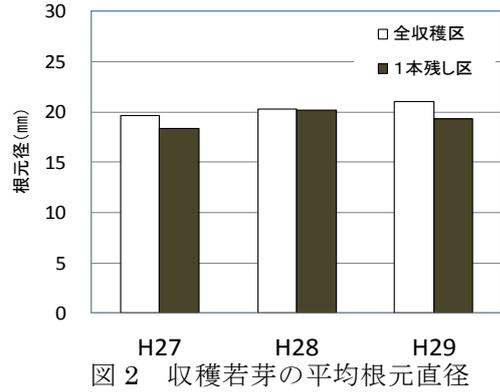
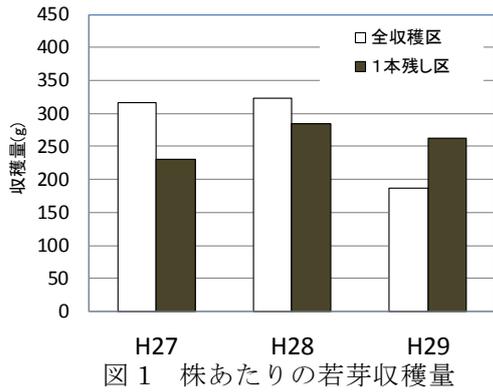
## 〔結果と考察〕

### (1) 栽培実証試験

両試験区とも H27 年春から収穫可能となった。H27～29 年の株当たりの収穫量は、全収穫区は 317g、324g、187g、1 本残し区は 230g、285g、262g となった。各年について両試験区の収穫量を比較すると H27、28 年は全収穫区の方が多かったが、H29 年には 1 本残し区の方が多くなった（図 1）。また、収穫した若芽の根元径は試験区間で大きな差は見られなかった（図 2）。

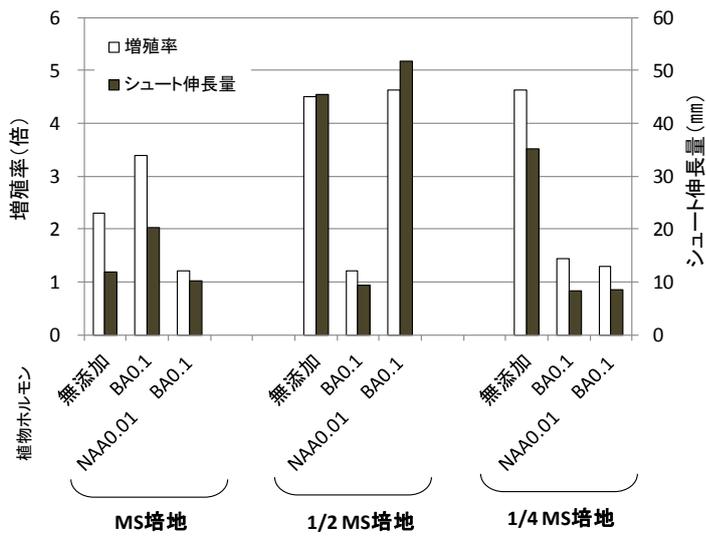
### (2) 組織培養による増殖

材料採取時期別雑菌汚染率は 5 月が 32%と最も低く、その後高くなる傾向がみられ 9 月が 82%と最も高くなり、材料採取は春先が適期と考えられた（図 3）。初代培養の基本培地は MS 培地が H 培地と比較してシュートの伸長量、発生率ともに高く、特に NAA 0.1mg/L+BA 0.1mg/L 区のシュート発生率は 77%と最も高くなった（図 4）。継代培養は 1/2MS 培地の植物ホルモン無添加区および NAA 0.01mg/L+BA 0.1mg/L 区が、シュート伸長量 46～52 mm、増殖率 4.5～4.6 倍とともに高く、今回検討した培地の中では継代培養に適していると考えられた（図 5、6）。



注) 植物ホルモン添加単位はmg/L

図4 初代培養におけるシュート発生率と伸長量



注) 植物ホルモン添加単位はmg/L

図5 継代培養におけるシュート伸長量と増殖率 (培養40日後)



図6 継代培養中のイタドリ

(1/2MS ホルモン無添加培地)